

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの民主化で復活する「嗅ぎたばこ」文化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 繁樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5092

モンゴルの民主化で復活する「嗅ぎたばこ」文化

国立民族学博物館教授 **小林 繁樹**

東アジア諸国は、国別にみると全人口と男性のたばこの喫煙率が高い。モンゴルでは、2006年の統計によると男性の喫煙率が45.6%と日本よりやや多い程度となったが、2002年に世界保健機関(WHO)が出版したThe Tobacco Atlasによる、男性の喫煙率が67.8%と調査国の中で最も高い数字が出たことは記憶に残っている。

モンゴルの嗜好品といえば、たばこと酒と茶があげられる。それほど、たばこはモンゴルのくらしの中で重要な位置を占めている。たばこの生産量も消費量も世界一の中国には、たばこは17世紀初頭、明朝の末頃、フィリピンから伝わり、嗅ぎたばこは17世紀の中頃に

ポルトガル人から伝わったようである。1691年にはモンゴルはほぼ清朝に帰属し、清の第4代皇帝である康熙帝(在位1661~1722年)は嗅ぎたばこを愛好したので、この頃にはモンゴルでもたばこをたしなむようになっていただろう。

嗅ぎたばことシガレット

モンゴルでは、現在、4つのたばこの楽しみ方がある。たばこの粉末を鼻から吸引する「嗅ぎたばこ」、刻みたばこをきせるに詰め火をつけて喫煙する「きせるたばこ」、刻みたばこを自分で薄い紙に巻いて火をつけて喫煙する「手巻き紙巻きたばこ」、そして工場で刻みたばこを薄い紙に巻いて製品とした紙巻きたばこに火をつけて喫煙する「シガレット」である。この仏語や英語由来の「シガレット」は、別に「紙巻きたばこ」ともいうが、日本では今や単に「たばこ」としてふつうに使う一般名称となっていて、たばこを話題とする本文では紛らわしいので、あえて「シガレット」としておく。

このうち伝統的なたばこは、嗅ぎたばこときせるたばこである。そして、ことに嗅ぎた

こばやし・しげき | 1949年、東京生まれ。南山大学大学院文学研究科文化人類学専攻修士課程修了。野外民族博物館リトルワールド学芸研究員、東京造形大学造形学部教授を経て、2004年より国立民族学博物館文化資源研究センター教授。専門分野は、道具人類学、文化人類学、博物館学。世界各地の道具とその使い方、文化やくらしとの関係を幅広く研究している。主な業績として、「世界のものづくり——創造のキッカケを動詞で試みる」国立民族学博物館編『茶の湯のものづくりと世界のわざ：千家十職×みんなく』（河出書房新社）、『世界一周道具バズル これ、なんに使うのかな?』（光文社）、「オセアニアにおける民族技術の観光資源化」近藤雅樹編『日用品の二〇世紀』（ドメス出版）など。

ばこは、人と人が挨拶をする時、自分の嗅ぎたばこ入れを相手の嗅ぎたばこ入れと交換して、互いに相手の粉末たばこを嗅ぐ、という独特な使い方、つまり礼儀作法ともいえる一連の行動様式を伴い、さらに嗅ぎたばこ入れは美術工芸品として、富の象徴として、またその所有者の社会的地位を表象するなど、モンゴル社会において重要な意味を持つものとなっている。しかし社会主義時代(1924～1992年)に伝統的な民族文化や宗教などが強く規制され、嗅ぎたばこの慣習も衰退した。

一方、1900年代から大量生産され始めたシガレットは、急速に人びとの間に広まり始めた。モンゴルに本格的にシガレットが入ってきたきっかけは、第二次世界大戦後に当時のソ連軍の兵士たちが吸っていたことによるようで、高齢者世代の多くがロシアやブルガリア産のたばこの銘柄を覚えている。

そして、1990年よりモンゴルは激変する。90年には複数政党制を導入し新政府が樹立、91年には統制価格を廃止、92年には社会主義を破棄して、国名もモンゴル国とするなど、民主化、市場経済化に大きくその舵を切り替える。この経済的混乱によって、地方からの失業者が首都に流入し、その結果の一部であろうが、少ない元手で手軽に始められるシガレットのばら売り路上販売が激増した。そして若年層で喫煙者が増加しているという印象を多くの人びとが感じている。

もっともこのところ、シガレットの路上販売は、首都ウランバートルの中心部ではほとんど見かけないようになっている。行政の指

導が行き届き始めたというよりも、経済が一時の混乱期を脱してか、貧しい人が減ってきているからのようである。もちろん、都市部では近年になり禁煙が流行するなど、健康志向の流れも顕著になってきている。

民主化による「嗅ぎたばこ」の復活

ところで、この民主化と市場経済化の流れは、当然のごとくモンゴルのくらしに新たな変化も巻き起こした。民族文化、伝統的文化の見直しやモンゴル仏教への回帰であり、都市化やビジネスで成功する新しい富裕層の出現である。

民主化後、信教の自由から仏教が再生し、僧侶がよく使用していた嗅ぎたばこも見直され始めた。また、国民の祝祭日に取り入れられた正月の祝い(モンゴルでは旧正月時に祝う)や、ナーダム(年に一度、夏の革命記念日に実施される国を挙げての祭典で、相撲・競馬・弓射の競技が行われる)なども盛大に行われるようになった。そしてこうして人が出会う場で、デールとよぶ民族服を好んで着るようになった。結婚式に着る人も増えた。このデールをきちんと着るということは、デールに付属する伝統的なアクセサリーも必要なアイテムとなってくる。そこで、デールの帯の右前には箸がついた鞘入りのナイフ、左前には大振りの火打ちがねのついた火口袋を吊るし、前の少し左寄りに嗅ぎたばこを入れた袋をつけて、着飾る人もでてきている。ちなみに、きせるは専用のきせる袋に入れてふところに入れたり、帯に吊るしたり、あるいは折れ曲

がらないように長靴に差し込んでおく。そして、デールを着て人と挨拶を交わすとなれば、当然、伝統的なたばこの慣習である嗅ぎたばこを使うこととなる。こうして「嗅ぎたばこ」は、民主化のなかで復活の兆しを見せ始めたのである。

92年の民主化以降、政府の庁舎内で民族服を着た国会議員等が正月の祝いを始め、挨拶の際、嗅ぎたばこが登場している。嗅ぎたばこ復活の象徴的なシーンである。そして、こうした風景がテレビで映し出されて、国民の間に広まっていく。それがあまりに華美に、ぜいたくに見えるようになったということで、今年の正月から政府庁舎内での祝いを中止したほどである。

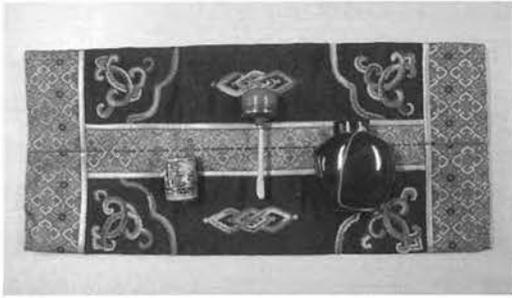


民族服デール姿で嗅ぎたばこ入れを持つ。左手は親指と人指し指で嗅ぎたばこをつまんでいる。左太ももには嗅ぎたばこ入れ用の袋がのっている。

嗅ぎたばこの道具

「嗅ぎたばこ」をモンゴル語でフールグ・ダーリンという。嗅ぎたばこ入れをフールグ、フールグに入っている粉末のたばこ自体をハムリン・タムヒ(鼻、たばこ)、フールグを包んでおく袋をダーリンといい、嗅ぎたばこはこの3種類の品物で一組となる。

モンゴルでは、このなかで一番重要なものが嗅ぎたばこ入れである。これは、ウイスキーのポケットボトルや、あるいは香水入れに似た形をしているびん型の容器で、大型となると手の平大で、高さ15cm、巾10cm、厚み5cmほど、ふつうは手の平にすっぽり納まる、高さ9cm、巾6cm、厚み3.5cmほどである。実際、このくらいの大きさが、嗅ぎたばこ入れを相手と危なげなく交換するには適当である。高級品となると、ドーム状のまるい蓋がサンゴ、口金が金や銀、そして本体がサンゴからヒスイ、玉髄、碧玉、シマメノウ、メノウ、水晶などの鉱石、黒檀や真珠母貝、象牙といった高価な材質からなる。鉱石の天然の地肌を楽しんだり、彫り物を刻んだり趣向を凝らしてあって、いずれも美しく、芸術品でもある。由緒も大切に、こうした品は価格も高く、200万円も300万円もする物もあるそうで、それ自体で財宝である。嗅ぎたばこ入れを交換する際に擦れるためか、鉱石製が多い。しかし、一般のくらしの中で目につくのは、蓋がサンゴ色のプラスチックで、口金が真鍮、本体がメノウや玉髄製の入れ物で、茶色地に白い模様がかかったり、乳白色をしている。蓋の裏には象牙や銀、あるいはプラス



嗅ぎたばこ入れ（本体）、嗅ぎたばこ入れの蓋と小さじ、缶入りのインド産嗅ぎたばこ、嗅ぎたばこ入れ用の袋。

チックで爪楊枝大の耳かきのような小さなさじがついていて、蓋をした状態では、さじが本体の首に開けられた直径5mm程の口に差し込まれている。本体は中がくりぬいてあって、嗅ぎたばこの粉末がはいっている。

粉末の嗅ぎたばこは、インド産が人気のようである。円筒形をした金属製の缶に詰められ、市場や寺の門前にある仏具屋などで購入する。

この嗅ぎたばこ入れフールグを入れる専用の袋ダーリンは、長さ35cm、巾17cmほどの大きさで、両端が閉じられて、口は中央部にフールグが入るくらいの大きさで開けられている。中央部に口があるポケットティッシュケースのような感じである。絹製で、錦織りの布が端に使われていたり刺繍が施されていて、美しい袋である。婚約者や妻が愛情をこめて作り、贈る。現在では商店でも購入できる。フールグを中にいれ、帯の下から通すと、上部がカバーになって簡単には落ちないようになる。あるいは三つ折りにして、ふところに入れておく。もっと小さい縦長の袋ウツウツに入れることもある。

ちなみに、中国では嗅ぎたばこを鼻烟（パイエン）、嗅ぎたばこ入れを鼻烟壺（パイエンフウ。日本語では鼻煙壺=びえんこ）といい、鼻烟壺は現在、世界中の美術工芸コレクターによって収集され、愛好されている。

嗅ぎたばこを使った挨拶のしかた

モンゴルでは、草原で遊牧民のフェルトのテントであるゲルを訪ねたりすると、まず入口あたりで声だけで挨拶をしたり、あるいは抱擁のような親密な挨拶ウンセフをして、席に着く。それから、おもむろに家畜や天気、くらしなど決まり文句の挨拶をする中で、嗅ぎたばこのやりとりが始まる。これをモンゴル語でフールグ・ズルーレフ（嗅ぎたばこ入れを交差する）という。

年少者が、まず自分の嗅ぎたばこ入れフールグを袋ダーリンから右手で取り出し、左手に持ち替えて胴部を軽く持ち、右手で蓋をねじるようにして少しゆるめ、自分の鼻を蓋との隙間に近づけて、嗅ぎたばこのにおいを嗅ぐ。あるいは蓋をとってさじの軸を鼻にこすりつけたり、さじに嗅ぎたばこを盛り、フールグを持ったまま左手の親指の爪の上においたり、親指と人指し指でつまんだりし、蓋をしてから、たばこを鼻の孔に持って行って、吸いこむ。年長者も、少し遅れて、同じ動作をする。

それから年少者の方から、蓋を少しゆるめたまま、右手の指先の方にフールグを持ち、左手を右手の肘の下にあてながら、相手に差し出す。少し距離があるときは、年少者が腰

を低くして近づき、あるいは片膝をついて、フルグを謙虚な態度と面持ちで差し出す。相手も軽く左手を右肘に添えるようにしながら、右手の指先の方でフルグを持ち、握手をするように相手の右手と合わせ、自分のフルグは相手の手の平に残し、相手のフルグをつかみ取るように受け取る。フルグが二人の手の中でくりとすり替わるように見えるが、そうではなく、手を合わす時にフルグ同士は交差し、受け取るフルグを越えて相手の手の平に置くのである。年少者が右手を若干、下方で、手の平を受け取るように少し上を向け、年長者は相手の手の平の上の方から、相手の手の掌の方へフルグを置くようにする。フルグがコチコチと触れ合う音がする。そして、右手から左手に持ち替え、互いが右手で互いのフルグから嗅ぎたばこを適量、左指にとり、吸いあう。蓋の隙間からおいを嗅ぐだけの場合もある。嗅ぎ合いが済むと、同様な作法でフルグを返す。返した後で、指にとった嗅ぎたばこを鼻孔にこすりつけるようにして、吸い込むこともある。交換し終えたあとで、自分のフルグからた



挨拶しながら、嗅ぎたばこ入れを交差するようにして交換する。

ばこを取り出し嗅ぐ場合もある。そして嗅ぎたばこ入れを袋ダーリンに戻して、一連の嗅ぎたばこ吸いが終わる。

相手と直ちに嗅ぎたばこ入れの交換を始める場合もある。複数人の場合は年長者から、そういう人がいない場合には時計回りに交換する。嗅ぎたばこの使用者は40、50歳代の働き盛りから高齢者までの男性が圧倒的に多いが、女性がたしなむこともある。

ちなみに、この嗅ぎたばこ入れを交換しての挨拶を、中国では互敬鼻烟とか互敬鼻烟壺(フウジン〜=嗅ぎたばこ(入れ)を互いにさし上げる)という。

さまざまな意味をもつ「嗅ぎたばこ」

モンゴル社会では最も重要な伝統的な歓迎のしぐさの一つであるこの嗅ぎたばこを使った挨拶は、相手に対する尊敬や、友好とか平和の気持ちを表すものであるが、具体的に貴重品ともなる嗅ぎたばこ入れを相手に渡して見せることで、その経済的価値を直接的に伝え、ひいては所有者の社会的地位を示すことにもつながっている。嗅ぎたばこの慣習は、単なる個人的な嗜好品の域を超えて、社会的、経済的、あるいは政治的な意味あいを帯びているものなのである。

ところで、この伝統的な嗅ぎたばこの復活には、ある特徴がみられる。社会主義時代の70年間におよぶ空白の時間を経ての伝統的な文化の復活は、いわば全ての世代に同時にたらされることになった。おおむね伝統とは高齢者や年長者がよくし、若者は疎いもので

ある。しかしそれが同時にもたらされ、しかも費用がかかる嗅ぎたばこは、むしろ若い働き盛りの富裕層に先を越され、尊敬されるべき高齢者が遅れをとる、といえる状況も生みだしているのである。

都市での実例の紹介

さて、ここからはいくつかの実例をあげて今日の状況を描くことにする。データは2007年の夏に現地で得たものである。

(1) 60歳以上の高齢の男性が本格的に嗅ぎたばこを使い始めたのは、60歳前後と共通している。社会主義時代は使う機会がなかったという。始めた理由として、全員がナーダムや正月といった伝統的な行事の際や、大事な来客があった時に自分だけ持っていないのは不都合である、と感じたことを挙げている。

(2) 20から50歳代の現役世代5人のうち、嗅ぎたばこを持っていないのは2人だった。既に持っている3人のうち2人が嗅ぎたばこを手にしたのは40歳代であった。30歳から40歳は年齢的に落ち着いてくる頃で、この年齢で相手が嗅ぎたばこを出して自分のがないというのは、モンゴルの伝統からみてあまり良くないのだという。

(3) モンゴルは末の息子が家督を継ぐ末子相続であり、嗅ぎたばこ入れも末の息子が受け継いでいくようだ。H氏が所有するものは元は祖父が使っていたもので、15歳位の時に父から譲り受けたものである。T氏のものも父親が亡くなったときに受け継いだもので、自分を入れて4代目のものだという。一方、O氏



嗅ぎたばこ販売店の様子（首都ウランバートルの市場ザハにて）。

は市場ザハで、P氏はチベット旅行の際に現地で購入したものを使用している。

(4) 出会ったすべての嗅ぎたばこ入れの所有者が言及するのは、第一に使われている鉱石の材質、第二にその大きさである。高価でかつよく使われている石はマナ、ハシ、チュンチュグナルといったモンゴルで産出される鉱石である。

(5) 嗅ぎたばこを使った挨拶に込められた意味を、全員が相手を尊敬する気持ちや友好、平和を表すものとして非常に重要視している。特に高齢者への尊敬の念を表すために、最初に差し出すという決まりがあることを全員が指摘している。P氏によれば、モンゴル人は渡す相手に対する尊敬の度合いを、蓋のゆるめ具合で表すのだという。

(6) 嗅ぎたばこが、現在のモンゴル社会の中で盛んに用いられるようになってきていることは誰もが感じている。高齢者の中には若者が所有するようになってきていると感じている人が多いようだ。こうした状況については、伝統的な文化が見直されている一環であると捉えて

はいるものの、おしゃれ意識が優先されているもので、まだ完全ではないとする。H氏三男（30歳）は、周りで正月に伝統的な服であるデールを着用する時にあわせて持つ人が増えていると感じている。田舎では若い人も持っている。これには伝統的な習慣を見直そうとの考え方が背景にあると思っている。また最近では宗教が復活してきたので、嗅ぎたばこが使われるようになってきたとも考えている。

草原での実例の紹介

(1) 社会主義時代には、海外の進んだシガレット文化を取り入れることが奨励され、嗅ぎたばこを使うことは少なかった。現在はその頃に比べると増えてきた。それは、モンゴルの習慣や伝統の見直し盛んになってきたためだと思う。最近、30歳くらいの若者が、高齢者と会った時に嗅ぎたばこを交換するようになってきた。特に、正月やナーダムでは若い人が非常に良い嗅ぎたばこを持っているのを見かける。67歳のU氏が現在使っているのは、子どもが去年ウランバートルで買ってきてくれたもの。昔使っていたものは、親から受け継いだものだったが売ってしまった。嗅ぎたばこがないのは具合が悪いので、今のものを買ってきてもらった。

(2) ゲルを訪ねた客を、47歳のTu氏が嗅ぎたばこを用いた挨拶で迎えたときの所作は次の通りである。(a) 互いに嗅ぎたばこ入れの蓋をゆるめて、一度においを嗅いでから、互いの嗅ぎたばこ入れを握手した手の中で入れ

替えるようにして交換する。(b) 交換する際に客は「こんにちは、お元気ですか。夏はどうですか」とたずねる。これに対して主人は「こんにちは。皆おかげさまで元気です。夏も良くなっています」と答える。(c) 互いの嗅ぎたばこを嗅いだ後は、先ほどと同じようにして嗅ぎたばこ入れを返す。(d) 次に同席していたTu氏の弟も嗅ぎたばこ入れを差し出すので、同じように挨拶が行われる。このとき客は「どうですか？仕事はうまくいっていますか」とたずね、弟は「家畜の仕事もうまくいっています。今年も夏はうまくいっています。雨も降りました」と答える。

おわりに

モンゴルの民主化に伴って復活の兆しを見せ始めた伝統的な「嗅ぎたばこ」の慣習は、人と人を結びつける挨拶の行動様式と、市場経済のあり方に合致した富の象徴という側面をもつために、モンゴル文化を代表する礼儀作法として今後とも盛んになっていくように思われる。たばこをめぐる文化として、ここしばらくは注目に値する。

謝辞 本論を執筆するにあたり、モンゴル国立科学技術大学のイチンホルローギーン・ルハグワスレン教授には、特に現状などいろいろご教示頂いた。記して感謝いたします。また、本論は財団法人たばこ総合研究センターによる平成19(2007)年度の研究助成によりなされた成果の一部である。現地での調査を可能にして下さったことに感謝いたします。